

ユクスキュルのカント受容

—生物学の二つの方向性

新松寛明（東京工業大学）

環世界論を提唱したことで知られるヤーコプ・フォン・ユクスキュルは、自らの生物学を「カントの学説を自然科学的に活用しようとするもの」であり、「カントの哲学の二つの方向への拡張」を試みたものであるとしている。

環世界の概念は、一般的に生物学に主体という概念を導入したものと理解され、これまでユクスキュルのカント受容は、あらゆる生物はその生物にとっての現れの世界を生きているという、環世界＝現象界という対応のもとで理解されてきた。しかしユクスキュルはそうした環世界を可能にする原理として「機能環」という概念を指定している。

機能環とは生物主体と客体の関係の原理であり、「主体と客体を連結する環」であるとされる。それは主体の存在と主体に対する現れとしての客体という不可分な関係を観察可能なレベルで機能的に分析するために考えられたものである。それはあらゆる生物の生の可能性の条件として、多元的主観性を貫く構成原理として捉えることができる。したがって機能環という概念は環世界を導く個体化の原理であるとともに、それらをひとつの平面から捉えることの可能な次元において考えられるのであり、現象を可能にするアプリアリな諸条件としての主観の統一性というカントの超越論的主観性に対応するのである。このようにユクスキュルはカント同様に生物の経験を可能にするアプリアリな形式を指定することから生物学の構築を始めているのである。

本論はこのようなユクスキュルのカント解釈の分析を通じ、「カントの哲学の二つの方向への拡張」と呼ぶ二つの生物学の道筋がどのように歩まれるのかを明らかにすることを目的とする。

ユクスキュルによって示される生物学の二つの方向性がいかなるものであるかを、ユクスキュルが『純粹理性批判』をどのように受容しているかということから導くことができる。

ユクスキュルは『純粹理性批判』は「しるしの形成」を記したものであると述べている。ここから「形成」という側面を取り出すのであれば、①それはそのような「しるし」を「形成」する主観についての議論へと向かう。カントにおいてはわれわれの経験を可能にするアプリアリな形式としての超越論的主観性であったものが、ユクスキュルにおいては機能環という概念として、分析対象になるのである。そして「しるし」という側面を強調するのであれば、②それは主体と、主体の構成する対象としての「しるし」＝われわれにとっての現象についての関係の学となる。それはあらゆる生物を取り巻く環世界＝「しるし」の世界の意味解釈、あるいはその意味体系の研究へと向かうのである。